

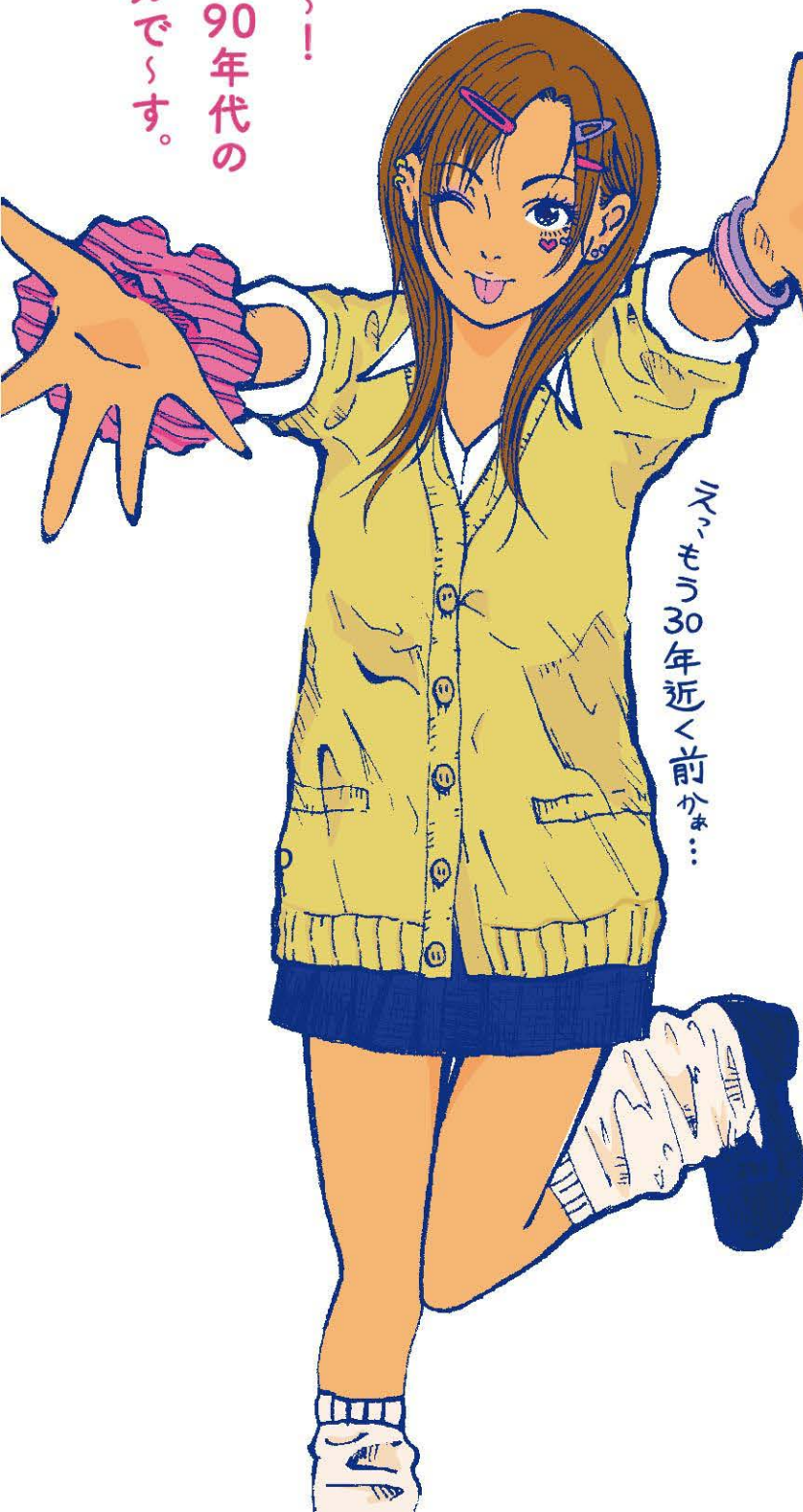
# 健 究 室

vol. 26  
Kenkyushitsu

2023年8-9月号

隔月刊

おひさ〜！  
ワタシ、90年代の  
コギャルです。



メッ、もう30年近く前か...

# 人は17歳に もどれるの？

# 17歳にもどるには、 一つ約束があるみたい。

17のころのような、Tシャツ一枚のムキ身の自分。もんもんとしていたし、  
恥ずかしいことや落ちこむことだらけ。オトナからの教えをこぼんだなあ。  
なんにもわからないくせしてさ。教えより、自分だけの新しい刺激を探していたんですね。

ブサイクでカッコいい時間じゃなかったけれど、でも、結果なんてわからない実験に  
挑むような、そんなわくわくが心の奥にあった気がする。ところが、人は40歳をすぎると、  
これまでの人生を足場に、これからを考えるようになりませんか？  
場当たりのじゃないところが、たしかにオトナっぽいです。

でも、「17にもどって、新しいわくわくを見つけないなあ」と願うならば、  
過去にとらわれた“私らしさ”は、自分を縛る鎖になり、過去に自分を閉じこめちゃう。  
ムキ身のわくわくを犠牲にして。

17の自分なら、過去を羅針盤にするなんて、ダサイことはしない。  
「これ好き！」って感じたら、脳ミソなんか動かさない。好奇心一つを動力に、  
場当たりの無計画に、勉強そっちのけでバカみたいに突っこんでいっちゃう。

17にもどる、ってことは、過去という絵の具で描いた“私らしさ”なんて、  
ポイっと捨ててしまうことなのかも。これが、約束なのかもしれませんね。  
わくわくする、ってことは、オトナの分別という名の「過去をよりどころにする弱虫」を  
捨てて、バカみたいに突入してしまうことだもの。

じゃなきゃ、17の自分にこぼまれる。17の自分が今の自分を見たら、  
「なにコワがってんの？」と鼻で笑って、もどってきてなんかくれないなあきっと。

あと先考えないで、  
ムキ身の好奇心で突っこむ。  
それが17歳。



東京在住  
中村香織さん

# 突然、 恋に落ちたの。

手に持つ写真は、17歳の香織さん

## お相手は、 なんとキックボクシング！ 44歳でどつきあい（失礼） 中村香織さんの中の17歳

なんでどつきあい？とかなりびっくり！だって、目の前にあらわれた香織さんは、色白で清楚な奥さまなんですもの。（スキンケア「究」ご愛用に感謝）人はホント見かけじゃわからない。

「産後ダイエットですね。近所にたまたまキックボクシングのジムがあったので、フィットネス会員で軽く汗をかきつりでした。」

そんなつもりがまさか、というやつで、キックをはじめて2年後には、朝フィットネスでは飽き足らず、夜のスパリング（人と戦いながらの練習）も追加！いまでは週に5日も通う鍛錬の日々だとか。

“えっ、香織さん、どこへ向かっているんですか？”ってことですけど、お話を聞くほどに、びっくり度はまだまだどんどんエスカレーション。

ええええっ!!タイへ武者修行に行ったんですかあ?? タイ料理屋じゃなくて、キックボクシングの源流であるムエタイ発祥のタイ王国ですよ??

「ネット見てたら偶然、ムエタイ留学の広告が。昔から私にはなぜか望んでいるものが、むこうから降ってくることが多い。お導きだと思って、夫に2人の子をまかせ、一人で3週間の修行にでたんです。」

お導き?たしかにそうかもしれませんよ。でも香織さん、人はそんなお導きの扉、見なかったことにするか、ムリムリっ!てボタンと閉めちゃうものですよ、ふつう。

「勇気ありますよねえ」というと、「すぐくビビリ症です」と意外なお返事。



人見知りで人前が大の苦手とのこと。美大卒の香織さんは、一人で絵やデザインを楽しむひとときも大好きなんですって。

でも香織さん、自分のキャラクターにぜんぜん縛られていないようです。そこがすごい!これまでの型にはとらわれず、好奇心にひたすら素直に、新しい自分をつくっていく。香織さんは17歳のように、思い立ったら直感で行動しちゃうタイプ。

「あ、そうだ!来月、タイ修行にまた2週間ほど旅立つんです。夫にはまだ伝えてないけど、伝えるのは彼がお酒で調子いい夜にしようかな笑」

あーあ、香織さんったらおチャメすぎる!

「ある人に、“試合1回は100時間分の練習に値する”って言われて、“よし成長するぞ”と大会に出場。この1年で2勝したんですよ。試合前には自主トレしますね。早朝、音楽でガンガン盛り上げながら5〜10キロ走ります。がんばっているランナーを見かけると、私も負けたくないぞ!ってテンションが上がります。」

いくつになってもハートが若い人、それが香織さん。わくわく生きるには実年齢なんて関係ない。そう教えてもらった気がします。

「もっと強くなりたいって思う。体が強くなると、心も強くなる気がする。子どもと外に出ると、心ない人に出くわすことも多い。そんなとき、こっそり妄想するんです。“この人にこの技を繰り出せば倒せるな”って。すると、心が安静になるんですよ。うふふっ」

う〜ん、香織さんったら、やっぱりすごい!



3週間、毎日キックとパンチ三昧



タイの仲間と浜辺でトレーニング

人生がつまらないとしたら、  
オトナになったから、じゃない。  
17歳の衝動を失くしたから。

サンセリテ札幌のベテラン社員、  
安川。50代のいまも、  
17歳の衝動がうずいています。

サンセリテ編集部です。オトナになると、組織人ばさやビジネス臭に染まってしまう人って少なくないですよね? 17で大好きになったものも、オトナの会社文化や価値観と衝突を起こしてだんだん消えていってしまう。これが若さを失うってことじゃないのか? 編集部は、そうにらんでいます。



その点、安川さんはゆるぎがない。会社員生活30年超の風雪に耐え、自分の中の17歳を守り育てている。「20代で勤めていた会社も、初期のサンセリテでも、見た目は制服で働くまじめなOL。裏側に音楽大好きライブ好きの安川がいる、なんて誰も知らないと思う笑」

安川さんは10代からとんがった音楽が好きで、高校でYMOにハマって、坂本龍一さんを40年以上愛し続けてきた人だ。50代のいまもお気に入りのバンドを追っかけている。音楽愛はハンパじゃない。でも会社では、音楽好きであることをかくしてきたという。

「もし同僚が、私が嫌いなバンドのファンだったら、趣味悪いよ、ってきつと毒づいちゃう。仲間を失くすでしょ? 笑 だから会社で音楽の話はしないです。」

そんな安川さん、ちょっと意外なことに、最近ではキラキラのアイドルにハマっているとのこと。ついに、ペンライトやうちわを買うようになったそう。

「夢があるんですよ。今の推しはダンスもすごくかっこいい!バラエティーとかでも一生懸命な姿にぐっときちゃって。」

好きな路線には変化があっても、安川さんの基本スタンスはぜんぜん変わらない。高校時代も今も、いくつになっても、心が震える衝動に素直に身をまかせていく人なんだろうな。

「ライブにいきたくしたらいく。いいなと思えばハマる。高校のころと変わらない。自分の“好き”という気持ちに、ただまっすぐなだけ。」

時間は限られている。誰かの人生じゃなく、自分の人生を生きたいですよ。17の衝動である意味、純な自分。ふだんはかくしていても、心のどこかに「純な自分」を永遠に保つことが、若い自分でいつづけるヒケツかも。



10代からコツコツ集めた大切なレコード



札幌在住お客様  
安川さん

お客様インタビューが実現するまで

STEP 1

サンセリテ編集部では、電話やお手紙など、様々な方法でお客様インタビューを受け付けています。



STEP 2

インタビューが決定したら、事前に編集部がお電話をし、日程や内容についてご相談させていただきます。



STEP 3

お客様のご自宅や、ご自宅近くのカフェにお伺いします。カメラで撮影も行います。  
※札幌在住の方には本社にお越しいただくこともあります。



STEP 4

編集部で試行錯誤し、責任をもってお客様のエピソードをおまとめします。



これまでの人生のこと、今の暮らしのこと  
お客様のお話をぜひ聞かせてください!

TEL 0120-111-577 Mail [inquiry@sincerite.jp](mailto:inquiry@sincerite.jp)

